父の言葉

須崎市立朝ヶ丘中学校　二年　宮﨑　達輝

「他人には見えていない自分だけの世界を生きられる。」

この言葉は、父が僕に言ってくれた言葉です。父のこの言葉で僕は、今も前向きに頑張っています。

小学校低学年の図画の時間の時のことです。校庭にある一本の桜の木を写生し、仕上がった作品を教室に飾るという授業がありました。みんなそれぞれ好きな場所に行って、桜の木を描き始めました。僕も男子数人と一緒に描いていました。木の色を絵の具で塗っていた時のことです。僕の絵を見た友達が、「この木なんか変じゃない？」と笑いながら言いました。

その時、僕は何のことか気づきませんでした。すると、その友達が木の色が変だというのです。僕の絵を見た他の友達も笑っていました。普通木を塗るとしたら、濃い緑と茶色の絵の具を混ぜて塗っていくと思うのですが、僕は黄緑に少し近い緑で木全体を塗っていたのです。

友達の言葉を聞いても、自分の色使いに疑問が持てなかったし、ましてや自分が他の人と違うなんて考えたこともありませんでした。そんな時です。学

校で色覚検査があることを知りました。色覚検査で、自分が他の人と違うことがはっきりするという不安が僕を襲ってきました。検査の日が近づくにつれて、その不安はどんどん大きくなり、心臓の高鳴りを抑えるのがやっとで、一日が長くて短いように感じる日々を過ごしていました。

そして、ついにその日がやってきました。検査を受けた僕は、担当の先生から説明を聞くことになりました。先生の前に座った僕は、不安と緊張で先生の顔を見ることができませんでした。そんな時、先生は「少し緑が混ざった色が見えにくいですね。でも心配はいりません。みんなと少し色が違って見えるだけです。」と優しく説明してくれたあと、「色弱といっても、主に赤と緑の区別がつきにくいタイプで、この色覚の特性を持つ人は世界におよそ二億五千万人存在しており、日本でも百人に五人は赤緑色覚異常で、色弱といっても弱い部類です。」と教えてくれました。

先生の説明を聞いて、少し不安はなくなりましたが、正直いって自分がみんなと違うということが分かったショックの方が大きかったし、これからの生活にどんな影響があるのか考えてしまいました。また、この時初めて父が僕と同じ色弱だったことを知りました。

家に帰って父に色覚検査で自分が色弱だったこと、さらに、父も自分と同じ色弱だったことを知ったと告げました。僕の言葉を聞いた父は、驚くでもなく何もなかったように「そうだよ。」と答えた後、「色弱でも悪いことだけじゃない。良いこともあるかもしれんぞ。他人には見えていない自分だけの世界を生きられるんだ。」と言いました。

「色弱でも悪いことだけじゃない。」という父の言葉に僕は驚きを隠せませんでした。

他の人と違う色に見えてしまうことがなぜ悪いことじゃないと言えるのだろうか。他の人と自分が違うことをなかなか受け入れられなかったし、これから先のことを考えると不安しかありませんでした。しかし、「他人には見えていない世界を自分らしく生きていけばいいのかな。」と父の言葉の意味を理解し、「ありがとう。」と父に伝えて自分の部屋に行きました。それからの僕は、父の言葉で物事を前向きに考えられるようになりました。

四年がたった今、「何色か？」と疑問に思うことはあっても、生活に生き辛さを感じることはありません。むしろ前の自分より「色弱」ということを素直に受け止め、前向きに挑戦できるようになっています。「他人には見えていない世界を生きられる。」という父の言葉には、「一人ひとり違いはあっても互い

に尊重し合い、色弱だからといって下を向くのではなく前を見て進んでいけ。」という思いが込められていたのかもしれません。

世の中には、人種や性別、障害など様々な違いによって差別されることがあります。けれど人間という生き物は、だれ一人同じ人はいないし、こうなりたいと自分が選んで生まれてきたわけではありません。だから、自分のことも相手のことも、ありのままを受け入れ互いの人権を尊重していくことが大切だと思います。

僕がこんな風に考えられるようになったのは、自分だけにしか見えない世界を生きるといった父の言葉の意味が理解できたからです。この言葉をこれからもずっと心に刻み、今よりももっと良い人間関係を築き上げていきたいし、父に恥じない生き方をしていこうと思います。